

体育の学力を考える

中島 義夫

一、基調報告にかえて

学習指導要領の改訂で、中学校体育に武道必修がスタートし、「二学期から本格始動・柔道を取り入れる学校が多く・指導者不足・怪我が心配・その対策は」などと紙面を埋める。しかし、そこには、「なぜその種目を取り入れるのか」との問いが、見つかからない。卑近な例だが、筆者の住む北広島市は明快といえ、市内の中学校の武道は道央圏で唯一、空手の授業が二学期から始まっている。1989はまなす国体で市総合体育館が空手競技会場となり、二〇〇七年からは全国中学生空手道選抜大会が毎年開催されている。運営に多くの市民・生徒が関わり、「空手が浸透している」とのナゼである。(会場運営責任の認識が高いとの意)

高慢な、厳格な意味づけを求めてはいない。教える側と学ぶ

側に「共有するナゼ」があればよい。そこから相互の対話(教授)―学習)と他に類しない「共同の学び」を追求する規律の連鎖を作り出すこと。

ナゼ・どうして武道(空手)をやるの?そして、その武道(空手)でナニを教えるのか、教えたいのか?それはナゼ!ダカラそのための指導体制・方法は、と、敷き詰められる。

現場では、費用や道具・場所の面から選択せざる得ないかもしれない。それは必然であつて、そこでナニを?教えていくかを追求することが大事であろう。(札幌学院大学 大瀬 隆)

二、実践レポートに学ぶ

1 「体育教師として考えること」〜授業・行事・部活動〜

厚沢部町立館中学校 白山 尚

1、はじめに

私の勤務する厚沢部町立館中学校は、檜山管内南部の厚沢部町中心地より南東に約10kmの盆地地帯にあります。産業の主体は農業です。次いで林業、木材業が占める農村地帯です。

小さい地区ですが約500世帯、1000人ほどが暮らしています。江戸時代末期に松前藩が館地区に城を建築した跡があり、現在発掘調査が行われています。5月には函館から五稜郭祭のスタッフを招きながら館城祭として幕軍・官軍に別れての行列が有名な地域です。また以前から地域では野球少年団が盛んに行われていましたが、過疎化の影響で子どもたちも少なく現在は、小学生から大人まで含めたバドミントン少年団が盛んに行われています。

館中学校は生徒数全校17名(1年生7名、2年生5名、3年生5名)です。過去2年間は生徒数が少なかったため、複式学級の中学校でした。今年度は7名の入学生を迎え、単式学級が復活しました。そのため学校の職員も6名から11名と大幅に増えました。(以前からいる職員は3名)生徒の性格を見てみると穏やかで、おとなしい生徒が多いです。生徒指導事案はこの4月から目立ったものはありませんが、少人数であるがために人間関係には、すくなくならず気を使いながらうまくバランスをとっているように感じます。

2、新しい学校で感じたこと考えたこと

ア、複式から単式へ

この4月に隣の江差中学校から館中学校に異動となり1年生の担任となりました。職員が大幅に変わりました。(3名転

出、8名転入し職員が大きくなりました。)特に3年生には新しい人が入ってきたことで、体育の授業のやり方をはじめ、規律、行事への取り組み方、様々なことで今までと違ったやり方になるだろうとということを話した。学校の顔としての3年生のまさに顔をつぶさないようにプライドを保持させながら3年と関わろうと考えました。

イ、行事への取り組み

他の学校と比べて極端に人数が少ないからといってそれを言い訳にしたいくないと考えました。人数が少なくてもやれることはたくさんある。子どもたちのやる気を引き出すことはもちろん、教師のやる気も重要です。行事をつくるのに多くの時間をかけます。やったぞという充実感を生徒に味わってほしいと思います。また、ここでも3年生の力を借りなければなりません。リーダーとして頑張った3年生にはどこかで輝けたり、苦労が報われるような場面の設定が必要だと考えます。頑張ったらその分いい思いをさせてやる。そんな仕掛けが必要だと思います。そういう行事の中心となって頑張る先輩の姿を見て、「来年は俺たちが頑張るぞ」とそれに続こうとする後輩の気持ちの中にわき上がるような取り組みができれば、伝統となり引き継がれていくのではないのでしょうか。

ウ、部活動

学校では部活動への全員加入制になっており、生徒は柔道部、野球部、卓球部、バドミントン部のいずれかに所属します。年度はじめの段階で、柔道部男子2名、野球部男子1名(他校との合同部活)卓球部 男女各3名、バドミントン部女子5名、男子3名が所属しました。この中で少年団との関わりがあるのは柔道、バドミントンです。柔道は厚沢部本町や上ノ国町での活動が中心のため、部活動時間途中で切り上げ少年団へ向かいまです。バドミントンは週3日午後6時〜午後9時30分頃まで小学生・中学生中心に学校開放を利用して行っています。柔道部の生徒2人は少年団に加入していますが、バドミントン部の生徒は8名のうち半分の4名だけが加入しています。

まとめてみますと、

授業の方針

- ①安全で楽しい運動をするために規律ある行動をさせる。
- ②多くの運動にふれさせる。
- ③単式、合同体育をバランス良く使い分ける。
- ④みんなで教え合おう。学び合おう。

行事の方針

- ①人数が少ないからできないは理由にならない。
- ②3年生の力を借りる。

- ③先輩から後輩へつなぐ。

部活動の方針

- ①部活、少年団ともに大切に活動すること。
- ②仲間を大切にしながら、技術や人間性を磨いていくこと。

授業や行事、部活動どちらにしても考えることは先輩から後輩へ脈々と引き継いでいく取り組みをいかにつくるかだと思えます。

3、具体的な取り組みについて

(1) 体育祭 5月20日(日)

異動して早々に5月の体育祭の準備が始まります。まず行進を含めた集団行動は3年にあらかじめ指導しておき、全体練習では3年生は1, 2年生にやり方を指導し、教師が注意役に徹した。指導は3年生。怒る役は教師。教師が3年生を決して怒ったりしないように気をつけました。ラジオ体操にしても最終的な判断は教師ですが、ラジオ体操の試験の御意見番として教師と一緒に立ち会わせてみました。来年度引き続き実施していこうと考えています。

(2) 中体連駅伝大会 9月26日(水)

檜山南部の中体連が主催する駅伝大会です。本校は人数が少なかったため、女子は2年ぶり、男子は5年ぶりの出場になりました。校内マラソン大会を長い間実施しており、現在も続いている数少ない学校です。夏休み明けからペース走の練習が始まり、9月中旬の校内大会を経て中体連駅伝に参加しました。校内マラソン大会への意欲はそれほど低くはなかったのですが、中体連駅伝となると嫌々感丸出しでした。これも3年生と話をして「新しい館中をつくるべ」と話したところ、しぶしぶ承知してもらいました。それもそうです。他の学校は選抜されてくる選手で参加するのですが、本校は全校生徒で挑まなければなりません。3年生のほとんどの生徒は初めて参加します。もちろん足の遅い生徒もいます。でも彼らは頑張りました。結果は、男女とも各6チームのなかで、男子は6位、女子は5位となりました。

大会の閉会式の際、審判長であったある校長先生から「館中学校の参加はしばらくぶりです。本当にすばらしい。この参加が今後の生活にいろいろと役に立つことでしょうか。」と思わぬ言葉をいただいた。聞いていた選手は心なしか顔がほころんでいたように思いました。

(3) 学校祭の取り組み 10月28日(土)

学校祭の演目の中に、よさこいソーランがあります。私自身一度も経験のないことでしたので、3年生をリーダーにし、全校を五つの班に分けて練習を行いました。3年生は後輩たちへ手取り足取り熱心に指導しました。「その手はこうだよ。」「もつと早く」等々あちこちの班から聞こえてきました。後輩たちも一生懸命耳を傾けながら、一つひとつの動作を確認していききました。

ここでも3年生のリーダー性を引き出して伝統として後輩が引き継いでいくという形を目指しています。

(4) 部活動の取り組み

本校の部活動は、全員加入制をとっています。部活動は、柔道、バドミントン、卓球、野球の4部活となっています。柔道部2名(男子)、バドミントン8名(男子3名、女子5名)、卓球6名(男子3名、女子3名)、野球1名(男子)が所属しています。生徒数に対して部活動が多すぎると感じました。部活動に関わっては学校として統一的な見解がなされないまま進んできたことが非常に気になります。

さて、私が担当(サブ)するバドミントン部は経験者の同僚の先生がメインとなり、二人でどうやっていくかを話し合い確認しながら進めています。バドミントンは個人競技ととらえが

ちですが、部活動の基本運営方針は①みんなであうまくなろう。②仲間を大切にしよう。③できるだけ休まないようにしよう。の3点に絞って進めてきました。練習の内容は、1学期は中体連に向けて練習と土日は他校への遠征をメインにおこないました。時には日曜日の練習日には、お昼ご飯をみんなであつて食べて、その後、学習会をすることもあります。

4、授業体育について

(1) 授業を進めるにあたって

ア、授業については単式学級を基本にしながら、人数をかけなければならぬ競技(球技)の時や男女の人数の関係で行う種目(柔道)については、合同でおこなっています。年間の指導計画については今年度新しく柔道、ダンス、ソフトボールを入れて計画を作り直しました。

※主に単式学級でおこなう単元

短距離走、水泳、マット運動、長距離走、ダンス

主に合同体育でおこなう単元

球技全般、スキー

イ、ともに学び合うことを目指して

器械運動はともすれば、できる子は一人でどんどん進むし、

できない子は一つの技でもがき苦しんで終わってしまう。同じ時間と同じ場所を共有して一人ひとりばらばらなこと自体とても違和感を感じる。互いに教え合い、助け合い人間関係を構築しながら学びを共有していくことが大切だと考える。

(2) 器械運動(マット運動)

目標と具体的方法

マット運動がどれだけできるのかもわからなかったが、目標としては「できなかった技ができるようになる」ことと「連続技を構成してみよう」の2つを目標にしておこなった。

各学年を基本として授業を進めた。

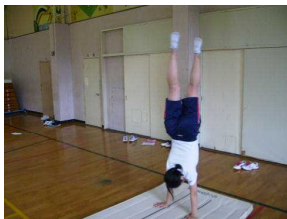
マット運動に限らず、どの種目をとっても運動のできる生徒とできない生徒の差がとてもある。前転で苦勞する生徒もいれば、バク転や側宙に挑戦して自分のものにしようとする生徒もいる。能力差がとても大きいと感じる。学級単位でおこなうが、普通規模の学校でいえば班単位のような感じである。

「マット運動をやるよ」と言うところの学年も「やったー」と喜ぶの半分。「ええー」と嫌がるの半分くらいの割合であった。できる技を調べてみると次図の◎となった。

10月に入ると学校祭の準備が始まり体育館が使用できなくなるために、授業はあわただしく8時間おこないません。正直、教え合いや話し合い学習が盛んに行われたとは言えない授業となっていました。

太字は男子生徒

番号	技	1年							2年							3年						
		A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q				
1	前転	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎				
2	閉脚前転	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎				
3	伸膝前転																					
4	飛び込み前転		◎		◎		○	○				◎	◎	◎								
5	後転	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎	○	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎	○	○				
6	閉脚後転	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎	○	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎	○	○				
7	伸膝後転																					
8	後転倒立																					
9	補助倒立		○	○	◎	◎	◎	◎	○	○	○	○	◎	◎	◎	◎	○	○				
10	三点倒立		○	○	◎	◎	◎	◎	○		○	○	◎	◎	◎	◎	○	○				
11	かえる倒立	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎				○	◎	◎	◎	◎						
12	首倒立	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎	○	○	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎				
13	前腕倒立																					
14	倒立																					
15	側方倒立転回	○			○	○	○	○							○	○	○	○				
16	側転後ろひねり90°	○			○	○	○	○			○	○	○	○	○	○	○	○				
17	側転前ひねり90°	○			○	○	○	○			○	○	○	○	○	○	○	○				
18	はね起き											○	○	○	○	○	○	○				
19	ヘッドスプリング											○	○	○	○	○	○	○				
20	ハンドスプリング	○				○						○	○	○	○	○	○	○				
21	前方宙返り																					
22	バック転		○	○								○	○	○	○	○	○	○				
23	後方宙返り																					
24	V字バランス	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				
25	水平バランス			○	○																	
26	Y字バランス				○	○					○							○				



↑きれいに逆立ちできました
前転に挑戦↓



↑ 飛び込み前転
と思いきや、ただの前転になってしまった。
ハンドスプリングに挑戦。↓



↑セーフテイー
マット上で
バック転失敗
勢いよく踏み切つて、このあと前方宙返りになります
↓



(4) 終わりに

体育教師として長年やってきているが、教師として日々力不足を痛感している。豊かでエネルギーシユな思春期を迎える生徒たちに、自分自身何をしてあげられているのか悩む。集団として学ぶ意義を生徒にどう伝えていいのか。なぜ、集団で学ぶのか。できない生徒をできるようにしてあげられているのか。わかるようにしてあげられているのか。

小さい頃から、ほぼ同じ顔ぶれで保育所、小学校と通っている生徒たち、小さい集団ではあるが、人間関係は流動的です。特に思春期のこの時期は、自己形成と欲求が高まるなかで、自己と他者との関係性もより高次なものとなっていく。その中で集団で学ぶ意義を体育科はもちろん学校全体で考えていきたくと思います。体育科は科学的な分析学習や系統学習、そして技術学習を通して豊かな人間関係を育んでいけるのだと思います。

学ぶ内容とそのため教材そしてできるわかるための手立てを常に模索することが重要だと考えます。体育で学ぶことの大切さを生徒がわかるそんな授業ができたらと思います。豊かな人間性をはぐくむ学校であり、授業を創り上げていきたいと考えます。

中学校の体育教師は、その学校の生徒指導の中心的な役割を

担っていることが多いです。もちろん職場の同僚も体育教師の指導性に少なからず生徒指導面で期待していることをうすうす感じ取れます。逆に同僚との軋轢を生じる場合もあります。どちらにしても職場の中での話し合いを基本にして、どんな学校を目指すのかを議論を重ねることが必要です。体育教師の考え方次第で学校の雰囲気が変わることのないようにしたいものです。硬派体育会系を否定はしませんが、行事づくり、部活動づくり、授業づくり、学校づくりを常に考えていく視点を外してはならないと思います。

現在、日本は原発について岐路に立っています。大間原発建設再開のニュースに道南の住民は恐怖を感じる人が少なくありません。「泊まりより近い大間」どちらの原発が事故を起こしても道南はその影響から逃れることはできません。先日そのことを朝の会で話すと、生徒たちは真剣に聞いていました。平和に安全に暮らしたと思うのは国民全体の願いのはずです。しかし、毎日元気に登校してくる生徒の顔見ると学校の中だけでも、人の痛みがわかる人間関係を構築して、平和で安全な生活を送らせてあげたいと願うばかりです。



写真はすべて1年生のマット運動より

◆話し合いの中から◆

マット枚数が少ない。もしあれば、学年を組んでいくと生徒も変わってくるのではないか。マットは個人習得ではあるが、ペアやグループなど、教え合いや集団演技を取り入れていくと良い。集団で学ぶことが大切であり、一人ではできないこともできてくる。また、体育ノートの書かせ方としては四観点から項目を設定していくと「わかる」に繋がるであろう。マット運動を確かな指導観を基に確かな力をつけさせているし、Tのコメント等を見ても丁寧な授業を行っていることがわかる実践である。

2 「みんながつながるフラッグフットボール」

別海町立西春別小学校 米谷 豊彦

純粹でちよつと不器用な子ども達

この4月に本校に転勤してきた。実は西春別小学校勤務はこれが2度目である。今から22年前、若き青年教師であった自分がそこにいた。9年間を過ごし、14年ぶりに戻った西春別小は、地域の離農や過疎が進み、全校児童が当時の3分の1に減少し、39名になっていた。当時担任した子どもやその兄弟姉妹達がぼちぼち親になり始めている。地域の歓迎会では昔の保護者や教え子が「先生お帰りのさい」と迎えてくれた。私が担任するのは3年生が7名、4年生5名の複式学級である。

酪農業が中心となる地域で、おおらかで純粹な子ども達の氣質も当時と変わっていない。ただ変化があるとすればたくましさ、ワイルドさに欠けるところか。子どもたちはやたらに、

「先生、〇〇していいですか。」

「先生、どうするんですか。」

と聞きまくる。失敗することや間違うことを恐れているのか。そしてコミュニケーションが不得手。ここでどうしてそんなことを言うのか。ある時は、自分の気持ちや考えが伝わらないと判断すると、さっさと話すことをあきらめてしまう。言葉の使い方、会話の仕方が非常に不器用なのである。しかし純粹で人

懐っこい子ども達。

そんな西春の3・4年の子ども達との学校生活が始まった。春、マット運動の連続技作りはグループ学習で始まった。みんなで見合うこと、みんなで教え合うこと、みんなで作り出すこと。連続技発表会は保護者も参観に来た。先生方や2年生も見学に来て大いに盛り上がった。夏、ドル平の学習は2人1組のコンビ学習。ポイントを声かけあい、次々に25mをクリアした。結局12名中8名が100mをクリアし、3名が25m。1人は来年に持ち越しとなった。

体育で「言語活動」ってどうやるの？

今年の西春小の研修の重点は「言語活動」を取り入れること。文科省が「言語活動の充実」を押し進めているらしい。そこに本校の子ども達の実態をふまえてこうなった。ご丁寧に今年は指導主事訪問が2回もある。だれも授業をやりたがらないので仕方なく、私ともう一人の先生(ともに50代)がやることになった。

「体育でやりません。」

「体育で言語活動って、どうやってやるんですか？」

別に言語活動のための授業ではないのだが、どうも体育は汗を流して元気に身体を動かすというイメージなのか。体育だからこそ人と関わり、言語活動が必要だと思うのだが。

体育科学習指導案

日時 2012, 10, 3 (水) 第3校時

児童 西春別小学校第3学年 7名(男2女5)

第4学年 5名(男2女3)

合計 12名

指導者 米谷豊彦

単元名 フラッグフットボール 「ゴール型ゲーム」

教材観

① 研究主題と学力について

① 本校の研究主題

確かな学力を身につけ考える力を育てる学習指導の在り方
～自ら感じ、考え、互いに学び合い、深めあう子どもの育成

研究仮説

(ア) 子どもの発達段階に合わせた言語活動の充実を図った授業や、言語環境の整備を推し進めることで、考える力(思考力、判断力、表現力等)を育てることができようであろう。

(イ) 研究の視点

・ 子どもの発達段階に合った言語活動の充実

・基礎基本的な学力の定着を図る学習指導法の工夫
 (ウ)体育における学力のとらえ方

体育は教科である。なので学力をつけ、人格の完成に迫らなければならない。では体育の学力とは何か。私は次のように考えている。

わかる (思考・判断)

技術習得の方法や法則性を見つけることや、認識すること

できる (技能)

その運動独自の技術を主体的な学習によって獲得し、表現すること

ともに学び合う (態度、思考・判断)

グループ学習の教え合いを通して、集団自治や人とのかわり方を身につけること

2.5m泳げたからといって、船が沈没して助かるわけではなく、ましてや溺れている人を助けることはできない。跳び箱が跳べたからといって大人になって役立つわけでもない。大事なことはどうやってその運動技術を獲得し、仲間とともに豊かな運動文化を享受することができるかということである。その教材でつけた力が他の教材、他の教科、生活の中に転化できる力が学

力だと考えている。教師に指示された通りに動いて早く跳び箱を跳べるより、時間がかかってもコツを見つけたり、みんなで考えたりして技を獲得することの方が大事だと思っている。

これまで体育の学習では、グループ学習を中心に取り組んできた。みんなが「できるためのポイント」が「わかる」ということは私からの指示だけではなく、グループの仲間とのコミュニケーションによって技術を向上させることができるということになる。教師の指示待ちではなく、子ども達の主体的な学習によって技術を獲得することができるようにしたい。

②フラッグフットボールについて

アメリカンフットボールのタックルの代わりに腰に付けたフラッグを取るようになったものがフラッグフットボールである。バスケットボールやサッカーなどゴール型ゲームは子ども達にも人気がある。しかし実はゴール型ゲームの特徴である「攻入り乱れる」ゲームは非常に高度な動きを必要とされ、できる子とできない子の差が激しくワンマンプレーと偶然によってゲームが展開されることが多い。

しかし「フラッグフットボール」はワンマンプレーごとにゲームがストップするので、作戦が立てやすく、自分の役割を理解し、みんなで意図を持ったオフフェンスやディフェンスがしやすいと考えた。

「ゴール型」ゲームでは「バスケットボール」や「サッカー」などの種目においても初期の段階においては「密集型」のゲーム様相が展開される。しかし短い時間の中ではなかなか「広がり型」さらには「臨機応変型」へと発展していくことが難しく、結局ゲームの中でどう動いていいかわからず「パス!」「パス!」の連呼が響き渡る。しかしこの「フラッグフットボール」の授業を通して「スペース」の意識を高め、一人一人の子ども達が意図を持ち、意味のある動きができるようにすることで今後の「ゴール型」ゲームの基礎を養っていきたいと思っている。

また、まだまだパスを投げたり、ボールが怖くてキャッチするのが苦手な子がいるので全ての子ども達がフラッグフットボールを楽しみ、得点ができるよう空気を少しぬいたボール(ミニラグビーボール)を使用する。

◎今回の授業で取り組むフラッグフットボールの基本的なルール

- ・1チーム3人とし、3:3のゲームを行う。
- ・攻撃は4回(第1〜4クォーター)とし、合計点で勝敗をつける。

・1回の攻撃は

①ボール保持者のフラッグを取られる

②ボール保持者がサイドラインから出る

③ボールが地面に着く

④ボールが3点ゾーンまで運ばれる

以上で終了する。

・得点は3点ゾーン、2点ゾーン、1点ゾーンを設ける。

・チームの3人全員が1点以上の得点をした場合、ボーナス点3点を与える。

・守備チームがインターセプト(ボールを奪う)して、スタートゾーンまでボールを保持した場合は守備チームに2点を与える。

・ワンプレーごとに30秒の作戦会議(ハドル)を設ける。

※ゲームを行っていないチームは得点審判と記録係を行う。

③この教材で育てたい力

(ア)2人以上のコンビネーションによるゴール(ゴール型ゲームの基礎)

(イ)自分の役割とスペースを意識したゲーム作り

(ウ)他者とかかわる力(コミュニケーション等)

④体育における言語活動設定の場面(ボール運動)

① 作戦作り

- ② ゲーム分析
- ③ 作戦会議(ハドル)
- ④ 体育ノートの記述(授業の振り返り)
- ⑤ 感想発表

(3) 児童観

明るく元気で運動好きの子ども達である。男子4名、女子8名という数の上だけではなく、行動面においても女子が中心となつて活動する場面が多い。3年生にはエネルギーなパワーを感じる。3・4年ともに中学年らしく活発で明るい面が見られるが、日常的に「先生どうするんですか」「先生これいいですか」など指示を仰いだり、小さなことで許可を求める場面が多く見られる。また人前での発言や行動を極端に苦手とする子、相手や周りの状況が見えない子、言葉のキャッチボールができない子など「人と交わる力」が不足していると感じる。

これまで体育の学習ではボール運動だけではなく、マット運動や水泳でも2〜4人のグループ学習を取り入れてきた。マット運動では、発表会に向けて友達の技の獲得状況を確認しあい、練習の仕方などを話し合いながら進めることによつて、側転を中心とした連続技のレベルの向上を図つてきた。マット運動にしかない運動の楽しさや達成感を味わうことができたと思つている。

水泳学習では「ドル平泳法」に取り組み、初期の段階で泳げる子と泳げない子の2人1組のコンビをつくり、一人が泳いでいる時はもう一方の子がポイントを示すなどの最小単位のグループ学習を取り入れた。授業最終日、子ども達は次々に自己ベスト記録を更新し、大歓声の中感動的ともいえる発表会となつた。

1学期に取り組んだ「じゃまじゃまサッカー」では、男子3人の活躍が目についた。自分が得点することはもちろん、作戦を指示したり、仲間を動かしてパスを出し、シュートさせる等普段の生活の中では見られないリーダー性が発揮された。チームが3人という小集団が生かされたと考える。

○フラッグフットボール グループ編成と児童の実態

A 3年女 MH	Aチーム	体育ノートの感想より
ボールをキャッチしたり、スペースに走りこむことはまだ不得手だが話し合いには積極的に参加し意思表示がで	・今日はフラッグフットで得点をとったからすぐくうれしくて、Yちゃんとはびまわりました。次は全部3点と	

<p>C 4年女 S Y</p>	<p>B 4年男 K T</p>	
<p>運動技能は高くないが、話し合いを進めたり、チームをまとめようという意欲が見られる</p>	<p>幼児性が残り、集団の中で人とかかわることが苦手。話し合いにもなかなか参加できない。技能的にも低い。</p>	<p>きる。</p>
<p>・話し合いに参加できたけど、ほとんどがHちゃんだったから、自分でももう少しがんばりたかった。 ・パスが通らないことが残念。一番がんばっていたのはHちゃんなんですけど、Hのためにできなかったから残</p>	<p>・次は話し合いに参加できるようにしたい。 ・遠くに投げるとパスが通りにくかった。</p>	<p>りたいです。 ・今日は点数はあまりとれなかったけど、パスはいっぱいできたのでよかった。</p>

<p>E 3年女 E R</p>	<p>D 3年女 U M</p>	<p>B チーム</p>	
<p>語彙は少ないが自分の意見は述べる。ボールの技能はあまりない。スペースの意識はまだない。</p>	<p>得点したいという意欲あり。考えを積極的に述べるが、最後には友達の見に従う。</p>		
<p>・私は足が痛かったけど、ちゃんとチームで力を合わせてできました。 ・私はパスが通らな</p>	<p>・まだもう少し作戦を考えたかった。でも昨日よりましだった</p>		<p>念です。</p>

C チーム	F 4年男 H N	
G 3年男 S T	走力、ボールを扱う技 能あり。スペースの意 識を持っている。チー ムの中心となって作戦 を考えたり、指示がで きる。	
ボールの技能、スペー スの意識あり。体育の 授業では、自分の考え をしっかりと述べること ができる。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 作戦通りにできなか った。ランB作戦をし ようとしても人がじゃ まをして行けなかった。 ・ 作戦通りにしようと したけど、パスが通る ことがなかった。もつ とパス練習をしようと 思った。 	<p>つたです。たぶん、下 すぎたのかもしれない。 ん。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ ぼくはみんなと考え ることができたり、チ ームの人に考えたこと を言えました。 ・ パスを通らなかった のはみんながボールを 		

I 4年女 D S	H 3年女 T S	
ボールを投げることや キャッチが苦手。こだ わりが強く、自分の意 見に固執する傾向があ る。	運動の技能もあり、作 戦作りにも積極的に参 加した。スペースの意 識はあまりない。	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 前の組の人とやった 時に、成功した作戦を 今の組の人に教えてや ったり、先生の作戦を ちよつとかえて点を取 ったりしてすごく楽し かったです。前の組の 人たちとの作戦だと自 分の意見を聞いてもら 	<ul style="list-style-type: none"> ・ TにパスをしたらT がとれなかったのは高 く投げすぎたので、こ れからはあまり高くし ないでいいボールを投 げたいです。 ・ Tが投げたパスが短 かったから近くで投げ ればよいと思いました。 	<p>見ていなかったからと、 あととどかなかった。</p>

		D チーム	J 3 年男 HT
<p>えませんでした。 ・私はパスをしてもいないし、受けてもいないけど、Tのパスが高すぎてSが取れなかったんだと思う。</p>	<p>・今日は作戦がぜんぜんだめでした。なんでもかというところ「ああしよう」「こうしよう」とかいったばい言ってたから時間がなくてだめな作戦でした。 ・パスが通らなかつた。なぜかというところパスするところが遠くなったり、あせったり、すぐ投げたりしてたからとれなかつた。</p>	<p>ボール運動の技能あり、スペースを意識した動きができる。話し合いにも積極的に参加する。</p>	

K 3 年女 SY	<p>ボールを怖がる。技能は低い、話し合いには参加する。</p>	<p>・作戦を立てたけど、相手の動きが思ったのとちがってせいこうでしなかつた。</p>
L 4 年女 YJ	<p>得点意欲が強い。話し合いでも積極的に意見を述べるが、ゲームの中で有効な作戦にはならない。</p>	<p>・負けてしまったけど、ちゃんとみんなは作戦通りに動いてくれてうれしかったです。 ・また負けてしまったけど次は勝ちたいです。</p>

⑥指導計画

⑤単元のねらい

へわかる (思考・判断)へ

攻める時の空間のつくり方や2人以上のコンビネーションの方法がわかる。またそれを防ぐためにはどうすればよいかかわかる。

へできる (技能)へ

ゲームの中で空いている空間を意図的につくって攻撃す

3・4		1・2	時
○フラッグフットボールのやり方や大まかなルールがわかり、ゲー	要性に気づく)	○しつぽとりゲームをしながら基礎となる感覚を養う。 (逃げる、追いかける、フラッグを取る等の感覚作り、及び作戦の必要性に気づく)	ねらい
・チーム作り(1チーム3人の4チーム)		・しつぽとりゲーム ・王様しつぽとりゲーム	学習内容

る2〜3人のコンビネーションやその攻撃を防ぐための基礎的な技術を身につけることができる。
 〈学びの目標〉 (態度、思考・判断)〈
 作戦カードや記録表を使い、コミュニケーションをとりながら主体的に学習していく力(作戦↓ゲーム↓ゲーム分析↓作戦の修正↓練習)を身につける。

(2) 全体計画(11時間)

本時	7・8	5・6	
○リーグ戦を行い、こ	○オリジナルの作戦を考え、意図的に空間をつくって攻めたり、守ったりすることができ	○作戦の必要性に気づき、ゲームの中で基本の作戦(教師から提示)を使った攻防ができる。	ムを楽しむ。
・これまでつくったり、練	・ゲームを分析し、作戦の修正をする。 ・相手攻撃を予想した守りのフォーメーションを考える。	・なぜ作戦が必要なのか考 える。 ・攻撃時の一人ひとりの役割を考えてゲームに参加できる。	験

9)	れまでの作戦の中から	習してきた作戦を生かして
11	選択し、役割を確認しあつてゲームを行うことができる。	みんなでリーグ戦を楽しむ。
	・仲間と協力して楽しくゲームができる。	・ゲームをしていない時は、協力して審判や記録の仕事をする。

5、 本時の展開

(1) 本時の目標

○ 今まで練習してきた「作戦」をゲームに生かすことができる。

(2) 評価基準

<ul style="list-style-type: none"> ・進んで話し合いに参加し、協力し合つて作戦を実行することが出来る。 ・自分の役割を理解し、動くことができる。 ・責任を持って仕事をし、リーグ戦を自分達の手で盛り上げることが出来る。
--

(3) 本時の展開 (10 / 11)

つ	か	む
<p>学習の流れ・子どもの関わり</p>	<p>1、準備運動・感覚練習</p> <p>・声を掛け合いながらチームごとに準備体操</p> <p>・ジグザグ走</p> <p>・パス練習</p>	<p>ボールの強さ、速さ、場所などのアドバイス</p>
<p>3、課題解決</p> <p>○ 対戦相手を知る。(体育係発表)</p> <p>① A v s C (審判 B 記録 D)</p> <p>② B v s D (審判 A 記録 C)</p> <p>○ 作戦が成功するように、みんなが伝え合い、励まし合つて</p>	<p>・対戦表の提示</p>	

<ul style="list-style-type: none"> ・ゲームをする。 ハドルの中で ・チームで作戦を選択する。 ・各自の役割を確認する。 ・リーダーが中心となって作戦のポイントを示し合う。 ゲームのないチーム ・チームで仕事を分担し合い、責任を持つて係の仕事をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・必ず1人1回は作戦選択の決定権を持つ。 ・作戦カード ・作戦ボードの活用 ・1回のハドルは30秒 ・得点審判3人 (1点、2点、3点ラインに各1) ・記録表、得点板、計時(ハドル) 各1 ・記述が苦手な子への支援 (記入の観点を指示) ・友達はどうな観点で感想を書いたか。
<ul style="list-style-type: none"> 4、本時のふりかえり ・本時のゲームをふりかえり、体育ノートに自己評価、感想を記入する。 ・感想を発表する。 5、次時の予告 ・次の対戦相手を知る。 	



- ⑥ 準備
- コーン(8個)
 - ボール(4個)
 - リブス(12枚)
 - フラッグ(12人分)
 - 体育ノート
 - 作戦カード
 - 作戦ボード



まために変えて

(1) ゲーム様相

〈第1段階〉

パスの乱発。ほとんど得点に結びつかない。パスの精度、キヤッチの正確性が低い。3・4年生ではパスが通るのはせいぜい5〜6m程度か。しかし子ども達はその理由に気がつかない。そこで記録係の子に得点が入った時、入らな

かった時の作戦はおおまかに「パス作戦」か「ラン作戦」を記述させることにした。すると「パス作戦」にはほとんど×マークがついた。「なぜか」「どうしたらいいか」を問う。すると「届かなかった」「パスを投げた人を見ていなかった」「キヤッチする人を見ていない」「遠くに投げると成功しない」等の意見が出た。

〔第2段階〕

「パス作戦」失敗の教訓から、子ども達は、投げる距離、捕球者の位置や向きを考え、ショートパスを使うようになった結果「パス成功率」が多少上がる。しかしここでディフェンス側が「セツト、レディー、ゴー」から一気にボール保持者に駆け寄り、プレッシャーをかける「プレッシャー作戦」で攻撃側の焦りをさそい、またまたパス成功率が落ちる。作戦を綿密化する必要が生じ、子ども達から「ハドル30秒は短い」の声上がる。要求を認めハドルは1分に。

〔第3段階〕

「全員得点のボーナス点」をめざし、その子に合った作戦を選択するようになる(例 「Aちゃんに得点させる時は、Aちゃんはキヤッチが苦手だからラン作戦で行こう」等)。それが相手にばれないようにフェイントなどを使うようになった。また子どもの中から「全員得点」というのは守っている時のイン

ターセプトでの得点も入るのかという疑問が出る。みんなで話し合った結果、それも認めようということになった。

得点は「パス作戦」より、「ラン作戦」の方が圧倒的に多くなった。

(2) 成果と課題

- ・作戦の重要性に気付き、作戦をつくったり、伝え合うことができた。
- ・グループで振り返り、反省や感想を全員が発表できるようになった。
- ・失敗しても人のせいにしたりせず、仲間を認めあえるようになってきた。
- ・なぜ失敗したのか、どうしたらいいのかという観点の記述をもっとできるようにしたい。
- ・一つの「使える」作戦を作り上げるには子ども達にかなりの時間を保証しなければならない。
- ・単元の「空いている空間を意図的につくって攻撃する2〜3人のコンビネーションを身につける」というねらいについては難しかったが、おとりやフェイント等を使つての空間の意識ができたと考ええる。
- ・後半は「パス作戦」より「ラン作戦」が多くなったが、さらに空間を意識させ「パス作戦」の精度を上げることが他の「ゴ

「ルールボール運動」の基本となる「2人以上のコンビネーションによるパスからのシュート」によりつながると考える。

あとがき

フラッグフットボールの授業は学芸会の練習の時期と少し重なってしまい、子ども達には忙しい思いをさせてしまった。体育の授業では「教え合い」を大事にしてきたつもりだが、学芸会という行事もまた同じである。劇の中でもできるだけ子ども達のアイディアや話し合いを尊重した(こちらもつもり)。学芸会もまた仲間と関わり合いながら表現し、自主的にものを考え、行動することをめあてとして取り組んできた。指示待ち姿勢の「先生、どうするんですか。」から「先生、こういうことをしたいんです。」に少しずつ変わってきているような気がしている。

学芸会が終わったらみんな「学芸会成功パーティー」をやることになった。係が計画をつくって、手作りゲームを楽しんだり、いつの間に準備したのか全員に「学芸会がんばったねカード」(飛び出す立体カード)が配られた。

「先生のもありますよ。先生も頑張りましたね。」

といって差し出されたカードの中にはきれいに彩られた「かたもみ券」が5枚入っていた。(ウルウル)

◆話し合いの中から◆

中学年であるため「空間に入り込んでボールもらう」までには至らなくて当然。高学年に繋がる内容であろう。スタート地点はコートの中の真ん中に固定すのではなく、作戦によって左右に動いてもおもしろい。苦手な子がフラッグを取ったら守備点をあげる等の試みがあってもよい。また、今後高学年になるとゲーム分析も組み込まれると良いであろう。3年生の段階から体育で言語活動を意識し計画されることが素晴らしい。多くは一斉指導での「やらされ体育」が多いのが現状。体育での真の学力をつけるためにも、「できる・わかる」といったこのような実践を望みたい。フラッグは指導要領にも組み込まれたので、今後も様々な実践を期待したい。

3 「運動会とリレー学習について」

中標津町立中標津東小学校 中島 義夫

子ども達はリレーが大好きである。全力で走るおもしろさや競い合う楽しさ、そして個人ではなくチームとして競うゲーム的要素を持つからである。

1. はじめに

運動会における練習ではなく、学習として成立するのはリレ

ーだと言える。

しかし、実際には時間的な面もあるが、「リレー練習」で終わることが多い。しかし、運動会反省の中では、「リレーが上手くないかない・リレー練習の改善を…」という声が毎年あがっている。

2. リレー練習からリレー学習への転換を

子ども達にとって、「練習」では単なる「暗記」でしかない。何故そうするのか？何故それが発展していくのかが理解できない、いわゆる「教えこみ」であるからであろう。

一方、科学的に学習し本質を段階的に理解（わかり）していく学習は、学力として定着し将来においても発展していくものである。最初は多少時間がかかるが、練習から学習へと変えていくことが、「イベント的運動会」から「学習運動発表会」へと質的变化へも繋がるように思う。何よりも子ども達の大好きなリレーを教材として使わない手はないと思う。

3. 時間がかかる？

現状では短距離走指導は2時間程度であろうか。それも含め早めに学習に取り組むべきである。体育では「陸上」分野での学習は運動会時期とマラソン時期（高学年は陸上競技大会時期も）しかない。そう考えれば運動会に照準を合わせた、ガッチ

リとした学習を組むべきである。見当では従来の時間+4、5時間で十分であろう。一度しつかりした学習計画で取り組めば、次年度からはスムーズに短時間で学習が成立してくる。

4. 記録と科学的学習を

時期的に、最初の大きな単元学習になる。その上でも年間を通して「学習スタイル」を学ばせるいい機会でもある。

・記録を取り合うことで、待ち時間を有効にできる。記録から科学的に検証する。

・体育ノート(体育ファイル)を基に見通しを持ち自ら学ぶ姿勢を。

・「できる」だけでなく「わかる」ことを重視し、さらに共同し学ぶ。

・「頑張ればできる」「気合いが足りない」という精神論ではなく、上手くなるための科学的系統的な道筋を検証させていく。

5. 教えたい事は簡単に教えない

どの教科にも言えるが、授業の核心は「考えさせる」ことが大事である。しかし、体育に限るとそうではなく、「教えこみ」が良く見られる。簡単に知ったことは簡単に忘れる。自ら苦勞して獲得したことは、ずっと覚えているものである。それが学力である。体育でも教えたい「核」は、子ども達に考えさせ見

いだしように導きたい。

6. リレーで学ばせたいこと(核)

まず、初期のリレーから世界レベルまで共通し、発展し追求しうることは、

◎トップスピードでのバトンの受け渡し

その他には

- メンバー順をどうするか。(チームとしてタイム短縮するために)
- テイクオーバーゾーンのとどこで待つのか。(前後の走者と絡んで考える)
- ◎スタートマーク(前走者がどこに来たらスタートするか)と、全力スタート(すぐトップスピードにするため)
- インに詰める必要性とタイミング、及び待機場所。
- バトン技術(受け渡し技術)
- バトンタッチ後の衝突回避

7. 学習の進め方

学年によっても違いが出てくるが基本パターンとして、

- ①オリエンテーション(目標、記録の仕方、授業の進め方、チーム分け、役割分担等)
- ②50m・100mのタイム記録取り。
- ③メンバー合計タイム計算と試しのリレー(タイムを取り、今後の基準とする)
- ④グループ学習(合計タイムをどれだけ縮めるかを競う) 毎時の目標を絞り獲得させていく。
- ・メンバー順 ・ゾーンの使い方 ・バトン技術
- ・インへの詰め方 ・スタートタイミング
- ⑤まとめのリレー (目標タイムにどれだけ近づいたか等で競う)
- ⑥運動会用メンバーでのチーム学習

8. その他

- ・練習時の距離は一人50M程度が良い。トラックが使えない時はコーンを置いての折り返し走での練習も有効である。
- ・チームは生活班が良い。別に作っても良いが、同質グループではなく異質グループで速い子や遅い子が混じっている方

が良い。(現実的・教え合いのため)練習時は男女混合も学級経営上は良い方向に繋がっていく。(男女の協力)

- ・チーム対抗で速さを競うのではなく、自分たちの合計タイムから何秒縮まったかを競わせる。または、試しのリレータイムから何秒縮まった等。(学習成果がはつきり見える)
- ・グループの合計タイムや試しのリレータイムの後、目標タイムを決めさせても良い。
- ・グループ人数は学級人数にもよるが、5〜6人が学習しやすい。
- ・欠席者がいてもできるように、合計タイムをすぐ計算するため電卓を持たせる。(学年別指導例、資料は次回)

◆話し合いの中から◆

運動会のための「やつつけリレー練習」ではなく、子ども達の中に学力として定着していく「リレー学習」をすべきである。そのための、基本的な考え方、教材の特質、押さえない要素、学習の進め方をまとめた。実際には、学校規模により運動会のリレーも様々であろうが、授業内容を行事に結びつけるためにも是非取り組みたい。各学年の担任がわかりやすく実践化しやすいような授業プランや挿絵等を今後作成し提示することが大事であろう。

三、まとめと課題

今回は、若い先生の参加もあり、次代に引き継ぐ面でも有意義な合研となった。また、小中学校に限られてた内容も、今後は高校体育にも及びそうである。

課題として、まず部活動や少年団活動のあり方について議論を重ねていく必要がある。地域ごとに実態が違うので深く掘り下げることが難しいが、一定の方向性を見いだしたい。また、世代交代という点では、過去の到達点を再度確認していくことも大事である。

(中標津町立中標津東小)